

# 『ツューリヒの恋文』(上)

——テクスト校訂・翻訳・解説——

大木 健一郎

## 前書き

1843年 Zürich 市 Rennweg に在ったある家の改築に際し、漆喰塗りの壁の裏の2本の梁の間に韻文書簡の小さな写本が発見された。家主はこれを直ちに当地の古書籍協会に委譲し、その依頼をうけた Ludwig Ettmüller により翌年学術的な刊本が公表された。写本は現在スイスの Zentralbibliothek Zürich に図書分類番号 RP 3 のもとに所蔵されている。

この6,9×4,8cm の小型の八つ折り版の羊皮紙の8紙葉（計16ページ）からなる小冊子は、1ページにつき4,7×3,5cm の範囲に各20行（2ページ分は21行）の線が引かれ、書簡ごとに纏められてはいるものの、詩行に分かち書きはされず（ただし第5・第6の書簡は例外）、やや丸みを帯びた、いわゆる Gotische Textura なる書体によって、紙面全面に連続的に手書きされているが、第4<sup>v</sup> 紙葉の下10行分と第8<sup>r</sup> 紙葉の下12行分ならびに第8<sup>v</sup> 紙葉全ページは空白のまま残されている。今日では冒頭の2紙葉（4ページ分）を初め損傷が相当に激しく、部分的には判読不可能の状態をも呈しており、このことには発見後に採られた19世紀の化学的処理が災いしているものと思われる。貴重な記念物のこのような危機に直面して、1988年、諸方面の協力を得、Max Schiendorferを中心とした原典の修復と複製本の作製と拡大写真の撮影と写本どおりの忠実な活字化と文芸作品としての再構成と現代ドイツ語への翻訳とが1冊の書物となって結実した。その成果はかなりに満足のゆくものといえる。

写本が作成された時期は13世紀の末から14世紀の初めごろまでと推定されている。これは独立して伝承された中高ドイツ語の最初の押韻された恋愛書簡の集成、いな、この種類の最古の作物に属するものとみなされ（→ Schiendorfer [1988], S. 79），原則的には対韻(Paarreim) が用いられ、三連韻(Dreireim) が3回、半韻(Assonanz) が8回、無韻詩行(Waise) が1回あらわれる長短6通の手紙と1編のライヒ(Leich) とが包含されている。

Ettmüller, Ernst Meyer, Schiendorfer等の研究によれば、独創的な詩人とはあまり言いにくい原作者のみならず、おそらくは2名の写本の筆記者たちの諸言語特徴は写本の出現した土地の高地アレマン語というよりも北シュヴァーベン・北エルザス・南ラインフランケン地域のそれらを示している。

この写本は、ひょっとすると、保管・発見場所からも察せられるように、Zürich に移住してきた手紙受取人の女性が自らに寄せられた愛の使者たちを密かに愛の手帳のなかへと筆写させたものかもしれない (Schiendorferはこのことには疑念を抱いているが；→ [1988], S. 81 / 84 / 86)。あるいはまた宮廷文学の伝統の流れに従った恋愛書簡の模範例文

集から選択・集成・筆記せしめられたものとも考えられる (→ Schulz-Grobert [1993], S. 35f.)。その文学的評価はともあれ、文学史的意義は決して少なくはないであろう。

日本語への翻訳にあたっては Schiendorfer の刊本に依拠し、オリジナルの対韻・三連韻に対応して、各詩行の音節数は異なるながらも、それぞれ -a, -i, -u, -e, -o, -n に終わる脚韻を踏む試みがなされている。ちなみに韻を踏んでいない孤立した 1 詩行は第 1 の書簡の第 23 詩行である。句読点は適宜処理した。

### Mittelhochdeutscher Text<sup>(1)</sup>

#### I

Ich bin ein brief unde ein bode:  
in mîns juncherren gebode  
sol ich willicliche wesen.

du solt mich, frowe, gerne lesen.

5 sîn lîp dir daz enbudet,

daz dich sîn herce drudet

vor allen schônen wîben.

clagen unde scriben

haizet er mich sîn lait.

10 ezen wart ninder mait

noch kain vrowe geborn,

ê wolde er lîden ir zorn,

#### 第一の文

我等は恋の便り、恋の使者でござる：  
我等が若殿の御指図、  
我等はいそいそとそれに従いおります  
るもの。

奥方様、我等に快くお目をお通し下さ  
れよ。

5 我等が若殿はお方様にかかるることを言  
づけておられます、  
お方様は我等が若殿の胸の奥にて愛し  
く慕われておいでなさる、  
いずれの美しき女人の方方に優り、  
いとこよなく、という言伝てを。

御自らのお悩みを嘆きの文に書きつづ  
れと、

我等が若殿は我等にお命じなさってお  
られまする次第にて。

いついかなるところにもお方様ほどの  
乙女、

お方様ほどの姫君がお生まれあったは  
ござりませぬ例し、  
よその女人からお怒りをこうむるなど  
まっぴらご免願いつかまつり、

1) 中高ドイツ語のテクストは基本的には M. Schiendorfer の刊本に従っているが、以下の諸文字はそれぞれ普通の活字に戻した： ① 彼が要するに Lesehilfe のために製作した文字 ē (= ae, oe) → e, ï (= ie) → i, ù (= iu, uo, üe) → u; ② 主に難読箇所等を Ettmüller の資料によるなどして印刷されたイタリック体の文字。

- danne daz er hede  
dîn durch sîne unstede.
- <sup>15</sup> ze lobe ioch ze brîse  
ioch bin ich nie so wîse,  
daz ich dir sagen kunne,  
wes dir sîn herce gunne.
- sver besen boden sendet,
- <sup>20</sup> sîn dinc er gar erwendet:  
daz ist ain jemerlicher mort.
- nu wil ich selbe sprechen mîn wort:
- frowe, ich bin dir underdân  
gewesen also verren,  
<sup>25</sup> daz man an manchen herren  
enbere mîne swere.
- frowe, ê ich verbere,  
ich wolt iuch holt sîn,  
und weren elliu lant mîn,
- <sup>30</sup> di wold ich ê läzen.  
in mac mîs nit gemâzen,  
ich verswîges mî danne ich sulle,
- そぞろ心のお咎めに、お方様からのお怒りを  
我等が若殿は喜んで頂戴いたしたき所存でおられますとぞ。  
人様を讃める、はたまた讃える、  
それらに我等まこと長けてはおりませず、  
我等には見つかりませぬ、お方様に申し上ぐる言葉も、  
いかな良きことども我等の若殿がお方様にお望みなされておられますやを。  
一旦ふつかな文の使いをお遣わしになれば、どなた様にてもあれ、  
ご自身の一大事取り返しもつかなくぶち壊しにしてしまう始末なれ：  
こはおぞましき死罪にもひとしき悪業でござりまする。  
さらば、いま我等はじかに我等の言葉もて申し上げたてまつる：  
奥方様、我はお方様の夢のご家来なりし  
はるばる遠き昔から、  
諸方の殿様方のもとにご奉公いたして  
はおりましたるが  
我に苦しみなど感ずる暇もあらざりき。  
奥方様、お方様へのつのりつのりしこの思い、  
一刀両断、諦め申す定めなら、むしろ、  
あらゆる国國よしや我が領有とならんとも、  
我は断固それらすべてをよその殿原に進ぜまいらする覚悟にござりまする。  
いかにしてもかかる我慢には耐えられませぬ、  
度を越え押し黙り控えこくっておりまするなぞとは、

- daz ain stille stênde mule  
luzel gewinnet:  
35 sam dut, der da minnet,  
ern sage oder ern sende:  
so enwirt es nimmer ende.
- vrowe, in dînen henden stêd mîn hail:  
wilt dû, so bin ich gail,  
40 wilt dû, so bin ich vrô.  
vrowe, ich brinne alsam ain strô.  
du maht mich haizen bîden,  
du maht mich haizen rîden,  
du maht mich haizen slâfen.
- 45 ich mohde schrîgen wâfen  
uber di grôze unbilde,  
daz mîns hercen wille  
so lange stêd gebunden.
- ich hân von dir befunden  
50 baide lieb unde lait.  
und wilt dû, vrowe gemait,  
mînen kummer eigin  
von mînme lîbe scheiden,  
sô hân ich gedinget wol.
- 55 wi kundic er wesen sol,
- 物静かにぼけっと動かぬ風車には  
何一つ物を生み出す力はござらん：  
ご同様に、恋をしておる張の本人，  
己の口で物申すか、使者を送って意を  
伝えるか、いたさずんば：  
金輪際その恋成就の日の目は見られえ  
ぬのがことわりなるか。  
ああ奥方様、お方様の御手のうちに我  
が幸せは委ねられておりまする：  
お気持ちのお動きめされなば、我には  
あまりの冥加〔ミョウガ〕なる，  
お気持ちのお動きめされなば、我には  
嬉しさの極み。  
奥方様、我は燃えておりまする、一本  
の藁しげのごとくに。  
お方様は我をしてこの地に留まるよう  
お命じなさるも，  
我をして馬に乗りこの地を立ち去るよ  
うお命じなさるも，  
我をしてこの地にて眠るようお命じな  
さるも御意のまま。  
あな、声を限りと嘆嗟の叫び揚げまほ  
しきものかな  
大いなる禍を悲しみつつも，  
我が胸の底に秘めたる心根の  
かくても久しく秘めたるままに朽ちな  
んとは。  
我お方様よりとっくり承っております  
るは  
愛の歓喜と懊惱とよ。  
朗らなる奥方様、お気持ちの  
我が内心に負える痛手を、望むらくは，  
我が身内より引き離したまわんとお動  
きめされなば，  
夢き我が夢の見事叶えられたる運びと  
はなるべけれ。  
いかにも抜け目なき遣り手とも申すべ

35

40

45

50

55

- der mich dar an bedruget!
- ich weiz wol, daz er luget,
- ob er mir immer gesaget,
- daz ain vrowe oder ain maget
- 60 ie guot zerwerbenne sî.
- biz her so was ich frî,
- nu bin ich worden dîn aigin.
- moht ich dir erzaigin,
- als rehd wê als mir ist,
- 65 so gebude dir wol vil lîhde crist,
- daz ich dich muse erbarmen.
- owê mir vil armen!
- nu sage mir, liebe vrowe mîn,
- sol ich dîn aigin diener sîn?
- 70 aller dugende ain crône,
- enpfâhe mich, frowe schône,
- unde sihe nit an mîn dumbhait,
- wan ich dur dich sendu lait  
verdrage an mînme lîbe.
- き御仁にてあらめ,  
我をかくも迷える子羊となされました  
るその彼は！  
我しかと承知いたしております、彼  
が真っ赤な嘘をつかれていなさるのは、  
彼つね日頃かくのごとく仰せられてお  
いでにて、  
いずこの姫君にてもあれ、あるはまた  
賤〔シズ〕の乙女子にてもあれ、  
男の子の志はよにもたやすう遂げられ  
まする、と。  
顧みすればついぞ我天下晴れての自由  
の身分でござりましたるを、  
ただいまは我お方様の卑しき下僕〔シ  
モベ〕と成り果ててしまひたり。  
もしもお方様にぶちまけてお示し申す  
をえなば、さてもよしなに、  
いかばかり我が胸内の真に物憂く深く  
沈めるものなるかを、  
きすればいとも尋常にクリスト様より  
お方様にお告げがござろうぞ、  
お方様におかれでは我にこそお慈悲を  
垂れたまわねばなりませぬ、とのお告  
げが。  
あわれ、いたつき破れにしこれの我が  
身は、いたましきかな！  
いざお言葉をたもれ、我がいとおしの  
君、  
はてきて、お方様の卑しき下僕となる  
を許さるるや、この我に？  
世にありとある美德の王冠を戴ける姫、  
70 美しき奥方様、我が身を受け入れたま  
え、  
また我が身の拙き愚かしさを眼に見た  
もうな、  
ひたぶるにお方様ゆえ憧れの苦惱をば  
耐えに耐えおる身にてありつるものゆ

75 ez wart nie man wîbe	えに。
holder dan ich dir bin.	星降るほど男の子の数に限りはなけれ, 強き情けに
mîn herce und aller mîn sin	お方様を恋い焦がれる我に敵する男の 子絶えてござなしと信ず。
lîdet von dir senden pîn.	我が心の臓、我が頭のなかの想いは悉 く
daz wendent, schône vrowe mîn,	お方様ゆえ憧れの辛き痛みに悩ませら れ続けてござりまするに。
80 und lâ mich gar dîn diener sîn.	この痛き苦しみを免れさせてたもれ、 我が麗しの君、
	全身全靈を捧げまいらせ、我をしてお 方様の下僕たらしめたまえかし。

## II

Gnâde, minneclicher lîp,	お恵みを下され、愛らしき御方よ、
gnâde, seldenrîchez wîp,	お恵みを下され、幸多き女人よ、
gnâde und drôst, mîn ainez!	お恵みとお救いを下され、我が二つな き君！
in gesach nie wîp so rainez,	しかすがに我かくも潔らなるおみなに まみえことなし、
5 also dich got geschaffen hât.	神の創りたまいしお方様のごとく。
gnâde, an der mîn sèle stât	お恵みをこそせちに我が魂は頼みとな す、
und der nu wont mîn herce bî.	お恵みの軒下にいま我が心宿借るもの ぞ。
gnâde, vrowe valsches frî,	お恵みを下され、偽りなき御前よ、
mîn drôst, mîn hail gar an dir lît.	我が救い、我が幸いはまたなくお方様 にかかりり。
10 gnâde, vrowe, ez ist an der cît,	お恵みを下され、貴き方よ、時はきま せり、
daz ich von banden werde erlöst:	我数数のしがらみより解き放たるをう べき時は：
ich sitze ûf ainme haizen rôst,	我いと熱き焼き網の上に横たわりおれ ば、
der brennet mich dur daz herce mîn,	熱鉄我が心の臓を隈なく焼き焦がしあ れるを、

- daz mir bezzer mohde sîn,  
 15 daz mich der dôd enbunde  
 und ich úz mînem munde  
 nimmer wort gespreche  
 unde mich der dôt gar zerbreche:  
 daz were ain iemerliche clage!
- 20 nu nim mich, frowe, hin ze grabe  
 und in daz raine herce dîn,  
 und du mir liebe und gnâde schîn.
- Gnâde, vrowe minnesan,  
 ich bin dir immer underdân  
 25 mit dinste, sô ich beste mac,  
 daz du mir gezaigest ainen dag,  
 daz ich dir hainlîche geclage  
 di nôt, di ich von dînen sculden drage.
- Swer âne sinne minnet,  
 30 wi selden der gewinnet  
 kaine minnecliche cît!  
 wan her Vridanc<sup>(2)</sup>, der qwid:  
 ain man, der rehde minne hât,  
 wi digge er von den luden gât!
- 35 er drûret ze allen stunden  
 und claget sîne wunden,  
 di noch unverbunden stânt,
- さればよ、かくあらば、せめて我が身  
 にはこよなきことならんか、と、  
 もしも死に神我をこの世より助け出さ  
 んか、  
 あるは我、我が唇の奥の奥から  
 二度と再び発せざらんか、一言も、  
 あるはまた死に神我を骨の髓までうち  
 ひしきつらんか：なれど、  
 そはまこと疎ましくも惨めなる嘆きの  
 地獄絵！  
 とく我を、貴き君よ、埋めて下され、  
 お方様の潔らけき胸のうちへと、  
 しっかとお示し下されまし愛の情けと  
 お恵みとを。  
 お恵みを下され、情け深き君、  
 我とことわにお方様の下僕にてあり、  
 尽くしうる限りの務め果たしおれば、  
 我に一日をお知らせ下されや、  
 我が困窮に密かに嘆きの機会を与えか  
 し、  
 お方様ゆえ耐えてきたれる生きるか死  
 ぬかの困窮に。  
 真心なく恋するものには、およそ、  
 いかにも希有な不可思議なるぞ  
 恋の成就の稔りを見るは！  
 かつてフリーダンク<sup>(2)</sup> 殿の語りし言  
 の葉：  
 誠の恋に胸ときめかせし男の子の、  
 よくもしばしば人々の群れより離れ去  
 りつることよ！  
 彼時を選ばずしおたれて  
 失恋の傷の深手を嘆き続け、  
 しかもその傷いまだに癒されおらぬ、

2) Vridanc = Freidank: 13世紀前半ごろの中高ドイツ語の格言詩 (Spruch) の詩人, 『善悪判別の知恵』(Bescheidenheit) [?1230] の著者として後世にまで根強い影響力を及ぼした。バイエルンの Kaisheim 修道院の記録ではフリダンクス・マギステルは 1233 年の死亡とされている。

wan si nieman enhânt,  
der si kunne gebinden,  
40 sô si bluden beginnen.  
  
diz main ich in mich, wan ich  
lîde degelich dur dich,  
frowe, und bin ungesunt,  
dar zu drûrig zu aller stunt.  
45 daz mainet, daz ich denke  
nach der minne, swar ich wenke:  
  
mîne sinne,  
di sint minne!  
ich bin ain man,  
50 der allez an  
di frowen lobet.  
mîn herce dobet  
nach ainem wîbe:  
mînme libe  
55 dut si wê.  
owê unde owê!  
daz bist du, frowe:  
di nôt, di schowe!  
dû bist aine,  
60 di ich maine,  
du bist aine, di mich sêre  
twinget, swar ich kêre.  
swar ich vare, da vers du mite:  
daz ist dîn site,  
65 daz dû in mînme hercen lîst.  
  
owê, waz dû mir jâmers gîs!  
  
nu merke, frowe, waz ich dir sage:  
  
in mînme hercen ich dich drage,  
  
so ist mîn jâmer manecvalt.

その訳： いざこにも助け人おらず，  
その傷癒す術なればなり，  
傷が血を吹くたびごとに。 40  
  
この話と我が身とひき比べれば、我  
日ごと夜ごとお方様のため胸つぶれ，  
あわれ御前よ、病をえたり，  
かてて加えてつねにうら悲し。  
煎じ詰めれば、想いの先は、 45  
足はいざれの方に向かえども、恋の恨  
みばかりかな：  
  
我が心，  
そは恋心！  
ますらお我は  
よろずのことによせては 50  
やんごとなきたおやめの方方を讀えつ。  
我が胸もの狂おしく  
ひとりの女人を求めけり：  
我が身に  
その方憂いをたもう。 55  
ああら、いたましき、いたましやのう！  
その人ぞお方様なれ、御前様，  
この困苦看過めさるな！  
お方様こそ唯一のお人，  
我がつのる思いのお方ぞ， 60  
お方様おひとりいとどしく  
心の重し、我がおるところの分ちなく。  
我いざこに赴けど、お方様ご一緒なり。  
お方様のおしきたり，  
そはお方様我が胸内にご休憩あそばさ 65  
ること。  
あら、いたましきかな、お方様が下さ  
れしは、なんたる苦しみぞ！  
いやさ、我が申し上げまつること、御  
前様、聞こしめされ：  
心の底の底にてお方様への慕情ひた隠  
しに忍びてはあれ，  
千千に乱れにし我が胸の苦しみ。

- 70 du hâs gewunnen mîn gewalt.  
 frô solt ich belîben,  
 mîn lait soldes dû zertrîben!  
 ob mir di selde wolde geschehen,  
 von wâren schulden wold ich des jehen,  
 75 daz ich selic were.  
 wi ungerne ich verbere,  
 ich lobedde dich.  
 jo hâs du mich  
 betwungen, frowe minneclich.
- 80 dû bist aine,  
 di ich maine.  
 dû bist aine, di mir wirret.  
 dû bist aine, di mich irret  
 aller mîner sinne.  
 85 gnâde, kuneginne!  
 ob dir nu were also mir ist,  
 so gelaide ich vil wol úf den list,  
 daz ich dir hulfe, wizze Crist.  
 dar an gedenke, rainez wîp,  
 90 und droeste mînen senden lîp  
 und lese mich úz sender nôt:  
 des gedenke ich biz an mînen dôt.
- お方様はついに我に対して生殺与奪の  
 権を握られたり。  
 いまこそ、いかにても嬉しきことにて  
 ありつらん,  
 我が苦惱お方様のお力にて雲散霧消の  
 曙には、なん！  
 万が一にも我が身にかかる幸運の訪れ  
 ありとせば,  
 語りたきものなれ、眞実の道理なれば、  
 すなわち：我果報者なり、と。 75  
 何をいやいや思い止まる躊躇いなどの  
 ありまするぞ,  
 お方様を讃えまいらすこの一念。  
 さなり、お方様はこの我一人〔イチニ  
 ン〕  
 身も心をもお縛りめされぬ、愛しき御  
 前。  
 お方様こそ唯一のお人,  
 お方様にぞつのる思いも。  
 お方様はただひとり我が胸の血を騒が  
 せつ,  
 お方様はただひとり我が平安を奪われ  
 れ,  
 残る限なく心の池の平安をば。  
 お恵みを下され、お妃様！ 85  
 お方様のご意向と我が意思とぴったり  
 重なるものなら、いやしくも、  
 我が無き知恵を存分に振り絞りつかま  
 つらんものを,  
 お方様の御ため粉骨碎身お尽くし申す  
 決意、クリスト様もご照覧あれよ。  
 潔らなる女人よ、ゆめ、お忘れめさる  
 な,  
 憧れに寝れにし我が身に慰藉を与えた  
 まえや,  
 憧れの苦難より我を救い出したまえ：  
 我この一事に希望をつなぐ、我死にい

たるその時まで。

## III

Gnâde, frowe, ûffe gnâde lône,	お恵みを下され、奥方様、お恵みのご褒美を下され、
dû bist mînes hercen crône, dû bist mîns gelugges hail.	お方様は我が心の王冠にてあらせられ、 我が幸運の女神の申し子にてあらせら るれば。
und gewinne ich immer an dir dail,	もし我つねにお方様のお傍に侍る折り をえなんか、
5 so wizzes, liebe frowe, daz,	知りたまえ、情けあつき君よ、このこ 05 とを、
daz nie wîp, noch juncfrowe baz	いまだかつていづれの女人もいづれの 姫も
gegruzet wart von ainem man—	快き挨拶の言葉男の子より受けられた るはなきを、お方様ほどに——
idoch sold dû den willen hân!	さはれ、お方様はご決心あそばされね ばなるまじ！
Swar ich nie kam, dar bist du kummen:	我のいまだ参ぜざる、その地へお方様 は早や参られてしまわれぬ：
10 du hâst dir aine gar benummen	お方様はまたくおひとりで奪い取りめ 10 されぬ
mîn herce zu aime hûse.	我が胸の奥の間を御自らのお住まいに と。
dâ enkan dreuve noch grûse	ここからはいかな脅迫も、いかな恐怖 も
nimmer úz vertrîben dich,	二度と再びお方様を追い出すなんどの 狼藉は無理、
hât úzzer allen wîben rîch	家柄よきすべての女人のなかより選び 抜き
15 di Minne dich drîn gedrugget:	恋の女神はお方様をこの屋のうちに押 し込められつ：
daz slôz ist furgerugget! Herceliebe frowe mîn, wan solde ich immer bî dir sîn!	すでに屋の鍵掛けられおわんぬ！ しんそこ大切な我が奥方様よ、 乞い願わくは我をいつもお方様のお傍 に侍らせたまわんことを！
daz ich dich nit gesehen mag,	お方様におめもじの件あい叶いません

20 daist mînre freuden gar ain slag.

dîn herce ganze dugenden hât.

dîn fuge mich des nit erlât,

mîn herce muze bî dir sîn.

swie verre sîn wesen von dir sî,

25 so minne ich doch ze aller cît:

mîn herce in dîme lîbe lît.

hercelieb, gedenke mîn,

wan ich vergizze nimmer dîn!

ば, 即 [ソク] :

我がひそやかなる喜びにとりては天から  
の鉄槌に値す。

お方様はよろずの美德のお持ち主なり。

お方様の人となりはゆめお許しにはな  
さるまじ,

我が心お方様のお傍より離ることま  
かりならぬぞと。

たとえばよし我が身お方様より幾万里  
さかりてあらんとも,

されど我とことわに恋してあらん : 25

我が心お方様の御身のうちにあらん。

しんそく大ないとおしき君よ, 我が  
こと忘るるなかれや,

我片時もおかげお方様へ想いを馳せお  
りますれば !

#### IV

Gnâden ger ich, rainez wîp,

ûf gnâde dinet dir mîn lîp.

dîner gnâden bedarf ich wol,

ûf gnâde ich dir immer dienen sol.

5 ob du gnâde an mir begâs

und mich gnâde erwerben lâs,

so hân ich gnâdelôser man  
nach dînen gnâden rîchen wân.

gnâde, frowe hêre,

10 begnâde mich durch wîbes êre.

Gnâde, vrowe minneclich,

#### 第四の文

お恵みに飢えておりまする, 潔らなる  
女人よ,

お恵みを糧にしてお方様にお仕えいた  
す我なるを。

お方様のお恵み我にはまこと欠くこと  
許されず,

お恵みを糧として我日頃お方様へのご  
奉公に努めたる。

一度お方様我へお恵みの心付けたまわ  
り, お方様のお胸に

我をしてお恵みに与からしめあそばさ  
んとの兆し萌えいづらん秋,

さて世に幸薄き男の子にしあれども,  
お方様のお恵みに頼もしく膨らみゆく  
夢の想いに耽ろうものぞ。

お恵みを下され, 誇り高き君,

とく我に先例を示されよ, 女人の方方  
の榮誉のために。

お恵みを下され, 愛しき奥方様,

du bist mit dugenden freuden rîch.	養われし美德の数数，お方様はいとど 福德豊かなれば。
Gnâde, minneclîchez wîp, mit driuwen dient i dir mîn lîp	お恵みを下され，愛らしき佳人よ， かねてより信義をのみ念頭に我お方様 へお仕えまいりしかど，
15 und dede noch gerne michels baz, wist ich, frowe, ob du daz von mir verguot woldes hân.	こののちも精をこめご奉仕を続けなん， 15 いままでになおいやまさり， かりそめにも我もし知りえなば，奥方 様，とにかくに お方様が我が苦心甚だ良しと認められ おらるるとかの思し召しを。
i doch mag ich nit gelân, ich muze dir holdez herce dragen.	いやさ，しかすがに，いかでか我いた ずらに諦めきれえますぞ， お方様につのれる思いこのままに固く も秘めねばならぬ，などとは。
20 Ja, rîcher got, wem sol ich clagen mîn herce lait und mîne nôt? wan ich bin wol halber tôt,	さなり，ああ全能の神，我誰に嘆くべ 20 きや， 我が心中の懊惱と我が困窮とを？ 我は半ば死せるも同然の身となり果て たるも，
wanne ich dich nit gesehen mac: verfluchet sî der selbe dac 25 und muze gode geclaget sîn!	お方様のお姿をおろがめぬ日： かかる日ぞ呪われてありたき， あわれ，神をも恨みつらみの的とはな 25 すべけれ！
got gruze dich, liebe frowe mîn, du waist auch vil wol, wer daz ich bin:	我が情けあつき奥方様，神のご加護お 方様の上にありませ， お方様もまたようくご存じの，我が 名：
dîn aigin diner. 2 $\frac{1}{3}$ <sup>(3)</sup> .	お方様の卑しき下僕。2 $\frac{1}{3}$ <sup>(3)</sup> 。

3) 拡大写真によれば：アラビア数字の〈2〉のつぎに同じ大きさでアラビア数字の〈3〉が書かれ，その〈3〉の大体真上あたりに小さなアラビア数字の〈1〉が乗っているようにみられ，ここに当然期待される脚韻を踏む語が省略されており，当事者以外には不明の記号が記されている。直前の詩行の最後の語が〈bin〉であることから，たとえば終末音節が-wîn, -lîn, -in等で終わる男性の名前も想像されるだろう。しかし模範書簡集の写し書きとしての見方からいうと，この記号の代わりに個人の名前を自由に書き込むために，あるいは秘密めいた演出効果を狙って，このようなシンボルが書かれているのかもしれない（→ Schiendorfer[1988]，S. 86f.）。

## 書誌

## I テクスト

- Ettmüller, Ludwig: 『Sechs Briefe und ein Leich, nebst einigen Bemerkungen über die Frauenliebe im Mittelalter』, in: 『Mittheilungen der Antiquarischen Gesellschaft in Zürich』, 2 (1844), S. 97–115.
- Wackernagel, Wilhelm: 『Altdeutsches Lesebuch』(Basel, <sup>3</sup>1861), Sp. 685–690=Ausgabe von Text II.
- Schiendorfer, Max (Bearb.): 『mine sinne di sint minne: Zürcher Liebesbriefe aus der Zeit des Minnesangs』(Zollikon, 1988), S. 38–59. — Dazu die Rezension von Jürgen Schulz-Grobert, AfdA 100 (1989), S. 138–141.

## II 参考文献

- Strauch, Philipp: 『Margaretha Ebner und Heinrich von Nördlingen: Ein Beitrag zur Geschichte der deutschen Mystik』(Freiburg / Tübingen, 1882).
- Meyer, Ernst: 『Die gereimten Liebesbriefe des deutschen Mittelalters』(Diss. Marburg, 1898).
- Meyer, Ernst: 『Der deutsche poetische Liebesbrief: Eine kultur- und literarhistorische Studie』, in: 『Zeitschrift für den deutschen Unterricht』17 (1903), S. 393–408.
- Ritter, Albert: 『Altschwäbische Liebesbriefe』(Graz, 1897).
- Spaarnay, Hendrikus: Artikel 『Brief』(Abschnitt Mittelalter), in: 『Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte』, Bd. 1 (Berlin, <sup>2</sup>1958), S. 186b–187b.
- Ruhe, Ernst Peter: 『De Amasio ad Amasiam: Zur Gattungsgeschichte des mittelalterlichen Liebesbriefes』(München, 1975).
- Kühnel, Jürgen (Hg.): 『Dû bist mîn, ih bin dîn: Die lateinischen Liebes- (und Freundschafts-) Briefe des clm 19411』(Göppingen, 1977) = Litterae 52.
- Schiendorfer, Max (Hg.): 『Johannes Hadlaub: Die Gedichte des Zürcher Minnesängers』(Zürich / München, 1986).
- Schulz-Grobert, Jürgen: 『Deutsche Liebesbriefe in spätmittelalterlichen Handschriften: Untersuchungen zur Überlieferung einer anonymen Kleinform der Reimpaardichtung』(Tübingen, 1993) = Hermaea N.F. 72.